

鶴屋南北全集

第六卷

鶴屋南北全集

第六卷

編集委員 郡司正勝 廣末保 浦山政雄 大久保忠国 藤尾真一 竹柴惣太郎

鶴屋南北全集 第六卷 (全十二卷)

一九七一年七月三十一日 第一版第一刷発行

定 価 四、五〇〇円

編 者 竹柴惣太郎 © 一九七一年

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九九)三一三一番
振替東京八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 株式会社三陽社
製本所 株式会社鈴木製本所

凡例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

- 1、台帳では、セリフの冒頭や、ト書きの文中の人物を、俳優名で示すが、これらは役名に改めた。
- 2、役人替名は各幕ごとに付した。
- 3、各役のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。
- 4、漢字の字体は現行の新字体を用いたが、正字・異体字などはなるべく底本の字体の再現につとめた。但し、あまりにも特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。

- | | | | | |
|--------|-------|---------|-----------|------|
| 遯↓遯 | 吳↓異 | 臺↓台 | 敕↓数 | 竊↓嶋 |
| 崙↓崎 | 慇↓船 | 柰↓松 | 綱↓網 | 勒↓勤 |
| 宜↓宜 | 結↓結 | 鞞↓鼓 | 抑↓叩 | 釵↓劍 |
| 取↓最 | 夙↓尻 | 襖↓装 | 勢↓勢 | 鞞↓春 |
| 木↓等 | 拔↓拔 | 迄↓迄 | 廣↓魔・摩 | |
| 欄↓欄 | 柳↓柳 | ひ・ゝ↓候 | | |
| 参↓参らせ候 | 入↓也 | ヒ↓被 | ムリ升↓ござります | |
| が↓より | 斗↓ばかり | べ↓しめ | と↓こと | と↓さま |
| む↓かしく | 成↓なる | 是↓これ | 被成↓なさる | 此↓ |
| この | 其↓その | 爰↓こゝ | 能↓よく | 斯↓かく |
| 夫↓それ | タア↓タベ | 武ア↓・服ア↓ | 式部・服部 | |
- 5、仮名づかいは、すべて底本のままとしたが、平仮名の字体は現行のものに改めた。また、助詞などに用いられた片仮名のハ・ミ・ニなどは、平仮名に改めた。
- 6、本文中ルビの原則は次の通りである。ただし、読みやすいものは、

校訂者の判断により適宜削除した。

イ、底本の仮名を漢字に改めた場合、底本の仮名は当てた漢字のルビとして残した。

ロ、読みにくい漢字には、*印を用いてルビを付したが、この場合は現代仮名づかいを用いた。

ハ、底本に付されているルビには（ ）を用いて原形を示した。

7、句読点ならびに清濁は、校訂者の見解によってこれを施し、また改め正した。

8、思い入れを表わす記号「○」や、反覆記号は、底本のままとしたが、「こ」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「々」「ゝ」「ゝ」に改めた。

9、当字は底本のままとしたが、明らかな誤字は正し、脱字は（ ）を付して補い、衍字は削除した。

10、校訂者が意識的に補った場合（意味不明・参考補足等）は、（ ）を用いた。

11、原本のままの場合はママと片仮名でルビを付した。

12、草双紙は平仮名で表記されたものがほとんどなので、適宜漢字をあてた。

13、虫喰い・不明は、それぞれ□とし、ムシ・フメイとした。

鶴屋南北全集 第六卷 目次

染纒竹春駒	7
容賀扇曾我	115
染替蝶桔梗	155
桜姫東文章	259
大和名所千本桜	339
曾我祭東鑑	347
小町紅牡丹隈取	373
三都俳優水滸伝	403
解 説 （竹柴惣太郎 服部幸雄）	483

校訂

染 繯 竹 春 駒……竹柴惣太郎
容 賀 扇 曾 我……竹柴惣太郎
染 替 蝶 桔 梗……竹柴惣太郎
桜 姫 東 文 章……竹柴惣太郎
大 和 名 所 千 本 桜……河竹本
曾 我 祭 東 鑑……服部幸雄
小 町 紅 牡 丹 隈 取……小池章太郎
三 都 俳 優 水 滸 伝……服部幸雄

錦 絵 (桜 姫 東 文 章) ……日比谷図書館藏

鶴屋南北全集 第六卷

そめたづなけのはるごま
 染繻竹春駒

第一番目 序 幕

東山下館の場

役人替名
 近習 石部金六
 同 土山郷助
 仕丁
 羽根川右馬之助
 奴 団助
 同 逸平
 本田弥惣左衛門
 腰元いろは
 腰元一
 同 二
 足輕横田彦兵衛
 百姓岡崎村与之助
 お末女中藤浪
 鷺塚官太夫
 鷺坂左内

松本 虎藏
 松本 秀十郎
 松本 三人
 中山 門三
 大谷 門藏
 市川 団十郎
 桐島 儀右衛門
 岩井 衆三郎
 松本 八十八
 芳沢 稻三郎
 沢村 川藏
 坂東 鶴十郎
 市川 団之助
 沢村 四郎五郎
 松本 幸四郎

一 伊達の与作

市川 団十郎

『元来ハ序幕ノ第一場トシテ、加茂社ノ場トデモ呼バレ
 ル場面ガ有ツタラシイガ、最初ノ部分ハ散逸シタモノト
 見ユ、僅カニ道具替リニ近イ二丁ホドガ残ツテイル。モ
 トヨリ舞台書モ無ク、一場トシテノ体裁ヲ整エテハ居ナ
 イガ、底本ニ随ツテ載セテ置クコト、シタ。』

ト仕丁あちこちと立さわぎ、

仕丁三人 御両所様、曲者とても、相見へませぬやうに、御ざりまする。

金六三人 シテ、手がゝりともなるべき品も見へ申さぬか。

仕丁三人 左様でござりまする。

郷助 何はともあれ、宝の色紙、御番の役目は伊達の与作。これとても

この場に居らぬは、何とも以て。ノウ石部氏。

金六 いかさま、郷助どのゝをいやる通り、神職を害なし、神前へさゝ

げし宝はい取つて、立退く盗賊。それをおつか参つたが、与作が見

へぬが不思議のひとつ。

郷助 コリヤ与作に疑ひがかゝりまするわへ。

トやはり捨て鐘、かすめたる台拍子。向ふはたゞにて、中間言人、
 箱提灯を持。右馬之助、麻上下、大小にて、あわたしく駈けて来り、
 舞台をためらひ。

右馬 それにお居やるは、土山郷助、石部金六、時がわりに参りし所、

かゝる珍事は子細ぞあらん。様子委敷存じの上か。

郷助 貴殿は藤浪右馬之介どの、

金六 一大事が出来いたした。

右馬 それは氣遣い。シテ、御家の重宝、手綱の色紙は、如何いたした。

郷助 されば御主君由留木の重器、手綱の色紙。今日未明に関東の使者

本田氏へ渡すの間、

金六 当社加茂の御屋しろは、御家の氏神。旧例に任せ、丹州より持参のまゝ、神前へ捧げ、今宵の御祈念。

郷助 然るに神職采女を害なし、御宝紛失。

右馬 シテ当番の伊達の与作、この座には、何故居らぬな。

金六 いかにも預りの与作、かいくれに相見へませぬぞ。

右馬 与作がをらぬが詮義の手がゝり、兼て関東入間家へ、主君の息女しらへの姫様、縁談極る。去に依つて、入間殿より駄路の鈴を由留木家へ送られ、丹州にとどめ置。その代りにはお屋敷より、色紙を送り越さるゝの所、道にてかゝる凶事あつて、御家の大事。御両所はこれより直ぐに、鷺塚、鷺坂両家老へ、逐一に言上致さるがよかるふ。

金六 心得ました。

右馬 拙者は直さま、与作が詮義。宮つこ立、社内をきびしく、番等をしやれ。

仕丁 ハツ。

ト死がひを片附け、門内へはいる。こゝにて神楽うちあげる。

金六 しからば我々兩人は、

郷助 東山の下館、片時も早く、訴へめされひ。

金六 承知いたした。藤浪。

右馬 ごされ。

ト明け六つの太鼓にて、兩人向ふへ走りは入る。右馬之助おもいれ有て、門内へは入。こゝにてこの道具まわる。

本舞台三間の間、常足の屋体。向ふ金襴、縁先、ぬりばね障子、左右に萩垣、秋草の盛り。上の方、萩垣の間より簀、本水落る事。前に詠らへの手水鉢、栗丸太の井筒、よき所にすえ物の松、この枝、本釣りの燈籠かけあり。下に二枚開きの枝折門。すべて都東山由留木家下館の体、こゝに逸平、奴の拵へ。団助同じく奴にて、水打の見得。白ばや

しにて、道具留る。

兩人 よひや、さ。

団助 サア逸平、たばこにせうか。

逸平 団助、をぬしも骨折り、サア／＼ゆつくりとやらかせ。

ト庭先に大あぐらをかき、兩人食吞附る。唄になり向ふより、本田弥惣左衛門、白髪鬘、野袴、羽織。腰元いろは、振袖、腰元にて、竹花生に薄の活けたるを持て、腰元一、二、いづれも練帽子にて出て来る。

跡より横田彦兵衛、絹看板、羽織袴、足輕の拵へ、薬包を掲げ出て来る。はるか下つて藤浪、練の帽子、高からげ、お末の拵らへ。与之助、木綿やつし、ぼつとせ、百姓体のこしらへにて、風呂敷包を背負ひ出て来る。皆々、本舞台へ来り、よき所に住ふ。

弥惣 これは／＼中間衆、御庭掃除か、太義々々。

逸平 あなたはお客人弥三左衛門様。唯今お帰りでござりまするか。

弥惣 左様／＼。腰元衆の御案内にて、京の名所古蹟を、逐一拝見いたし申たて。

団助 それはよひ御慰みでござりました。いろは様、おくたびれでござりませふね。

いろ イヤもふ、弥三左衛門様のお供をして、いつになひ、よい慰みをしましたわひの。

腰一 殊に取分け天気はよし、西山を茸狩いたし、面白ひ事でござりましたわひな。

腰二 お姫様へ、何かなお土産と、アレあのような美しい尾花を、いろは殿が手折つてじやわひな。

彦兵 イヤもふ、西山の柴つ原に、松茸が、あそこにもによつこり、こゝにもによつこりと、コレ御覧じろ、これ程抜いて来ました。

与之 左様ならあなた方は、今日は茸狩がござりましたか、それはよいお氣ばらしてござりませふ。

トいろは、藤浪を見て、

いろ ヤ、そなたは藤浪じやなひか。宿下りと聞たが、今御殿へあがりやるのかや。

藤浪 左様でござりまする。私もこの間、宿下りのお暇を戴まして、今日よふ／＼お屋敷へあがりましてござりまする。見ますれば、あなた方も茸狩りのお帰りと存じられますわいな。

逸平 ア、藤浪さん。今日お帰るかへ、お宿下りは大かた、芝居であらふ。定めし大浮きに浮いた、面白ひ事が有つたであらふね、エ、うら山しい事だぞ。

トおもいれ。

団助 コレ／＼逸平／＼。大分手まへ、藤浪さんの事を、味にせりふを廻しかけるな／＼。

逸平 エ、手前達が知つた事じやアねへ、打つちやつて置きや／＼。与之ヤ、団助殿か、わたしも今日は、この藤浪殿がお屋敷へあがるから、送つて行つてくれとの事、そこでお屋敷へ来ましたが、コレ、貴様がこの中、頼ましつた、アノ、

団助 ア、これ／＼、その咄しなら、マア／＼跡で、ゆつくりと聞こふ。そふ思つてゐやれよ。

与之 そんな跡でゆつくりと咄しませうが、コレ、頼の品も、今日こゝへ持て来たほかに、

団助 ハテマア、その咄しは後の事にしやれといふに。

トおもいれ、

与之 おつと合点だ。

彦兵 コレ／＼、団助々々。何か、アノ若イ人も持て来たといふが、この横田彦兵衛も、抜て来たこの木の子、もし／＼、あなた方も御覧じませ。

ト苞の内より、いろ／＼の木の子を出し、

コレ、この木の子は、蛇の屋敷をした跡に出来る、蛇茸さ。こいつが天狗たけといひます。どれも／＼うまひ木の子さ。

弥惣 これはしたり、その様な物を喰つて、我は又、食傷をするぢや。コレ／＼、そちには、チト頼たい事が出来たわへ。

彦兵 モシ／＼、私へ何の御用でござりまするへ。

弥惣 イヤ、別儀でもおりないが、丹州の御屋敷へ、身共、大切な眼鏡を、お客の間の袋戸棚へ忘れて参つた。一走りいて、取て来ておくりやれ。

彦兵 これは迷惑でござりまする。私ばかり、お屋敷の御家来でもござりませぬ。ちと外の中間共へ、御頼なさるゝがよろしうござりませふ。

逸平 これさ／＼彦兵衛殿。おいらは御家中の二合半。貴様は殿様のお人ではなひか。

彦兵 サア、それわな。

団助 骨惜しみをせずと、御使に行つて来やれ／＼。

弥惣 これさ、手をつひて頼み申すは。お手前、早ふ身が眼鏡を取つて来てくりやれさ。

彦兵 よふござります。折角の御頼み、左様ならわたくしが取つて来てあげませふ。

弥惣 それは千万泰のふ存する。

いろ 本に、お国屋敷へいきやると聞て、思ひ出したわいな。コレ逸平殿。こなさん、この状を届けて下さんせ。

ト懷より文をいだし、逸平に渡す。逸平見て、おもいれ。

逸平 モシ／＼、いろは様。又、私へ届けてくれるかへ、大方彼のお人へでござりませふが、そのお使は奴めは、御免なされませ／＼。

いろ いひやいの、氣遣ひな文じやござんせぬ。コリヤ、アノ、重の井様が、そなたに渡して、その宛名の主へ、届けて貰ふのじやわひの。

逸平 エ、何と仰しやります。この宛名の所へとは、○

ト見て、

コリヤ、わしが在所の、姉御へ「母御へ」

サ、それ届けるも、あの子の便りをな。それ、せめて返事を、そ

なたの働き。

ト日顔にて思入。この内、藤浪心得ぬこなし。逸平思入あつて、

逸平 委細は奴め、承知仕りました。

藤浪 コレ逸平殿。その文を、一寸私に見せなさんせ。

逸平 エ、滅相な、どふしてこれを、

トふところへ入れる。

藤浪 それじゃといふて、現在、わたしが見る前で、

与之 エヘンくく。

ト咳にて紛らふ。

藤浪 エ、あた阿呆らしひ。

トつんとする。

弥惣 サア、その方は、今の使ひを、早ふ頼むく。

彦兵 ねイく、かしこまりました。

いろ コレ逸平殿。必ずともに、今のを屹度。

逸平 ハテ、奴が、きつと。

藤浪 エ、なんじややら、

ト寄るを、

逸平 ハテ、なんであらふと、こゝでどふして。

弥惣 サ、女中方、案内頼。

腰元 かしこまりました。

いろ サア、藤浪も、皆さんと一所に。

藤浪 ハイく、参りまするわひな。

トつんとする。

逸平 ハテ、ひざる屋敷さ。

藤浪 エ、又、そのよふな。

トをもいれ。

彦兵 ドリヤ、いそぎませふか。

ト唄になり、弥惣左衛門、いろは、奥へは入る。藤浪びんしやんする

を、逸平、思入れ有て、は入。彦兵衛、向ふへは入る。團助、与之助残る。合方。

團助 コレ、こなたは、咄しの有つたその石を、持つて来たのか。

与之 持つて来ました。コレく、○

ト風呂敷の内より袱紗包のあつらへの石を出し、

これが、カノ、誉石といふ名石さ。

ト渡す。

團助 アノこれが。なる程、珍らしひ石だが、どふして貴様は持て居るのだ。

与之 さればさ。元わしが親仁は岡崎村で、杉山唯てつといふ医者でござつたが、先祖から持伝へたこの名石(めつた)に無いものそうにござるが、百姓のわし等が持つていたとて、役に立たぬ代物に。シテ官太夫様には、マア、なんの薬りになされるのだナ。

團助 さればさ、ア、見えても御旦那は、殊の外の御多病、医者はいふには、用ゆる薬りに入れねばならぬ、この誉石。そこで薬種屋を尋ても、扱、足無ひ品。貴様が持てござると聞、そこで無心をいつたのさ。

与之 イヤもふ、わしらが身分で、たしなんでから、無駄な一葉。人様の病のなをる事ならば、随分とあげますて。

團助 そりや忝ふござる。シテ、コリヤア直だんは、どの位なものだの。与之 ハテ、商売にする品ではなし、貴様、番頭して、よひほどに下さひませ。

團助 それだと云つて、どの位な代物やら、直だんの所は、

ト思入。向ふにて、

よび 官太夫出仕。

トよぶ。

團助 ア、御旦那の御出。コリヤア幸ひだ。あなたにお目に掛けた上、直段の相談。

与之 ハテ、どふでもよふござるわな。

団助 そんなら、お次で待たつしやりませ。

与之 団助どの。

団助 サア、ござりませ。

ト唄になり、団助、石をくわひ中して、与之助附ひて奥へはいる。

よび 左内出仕。

ト呼び。序の舞になり、向ふより、鷺坂左内、上下、大小にて出て来り(統いて、鷺塚官太夫出て)花道にて。

官太 それへお出なさるゝは、左内殿ではござらぬか。

左内 これはく鷺塚氏。お早い御出仕。先々お先へ。

官太 イヤく、そこ元より、

左内 これはしたり、サ、貴公様より、

官太 しからば御免下されひ。

ト入り替つて、兩人本ぶたいへ来る。この時、二重舞台は、よき所まで押し出す。奥より弥惣左衛門、麻上下に着かへ、出て来り。

弥惣 これ(は)く、御両所とも、御出仕を相待ち居つたて。

官太 その許は本田氏。永々の御逗留、さぞ御退屈でござるふ。

左内 しかしながら、をし附、色紙は伊達の与作、持参いたすでござらふ。さすれば京都の御逗留も、今少し。さてく御名残惜しう存じまするて。

弥惣 これは左内殿の御挨拶、忝のふ存ずる。拙者も年寄の、上方三界罷り上りましたも、その元の御主人、由留木家の御息女しらべの姫様、手前主人入間家へ御縁談、めでたふ調ひ。お興入の前方、御契約の通り、手前屋敷の重器、駅路の鈴をお渡し申、引替と致し、手綱の色紙を受取り帰るは身共が役目。その儀相済ますれば、明朝早速、関東へ発足、又候や引返し、姫君の御迎。シテ、色紙は事無ふ、只今お渡しでござるかな。

左内 いかにも、その氣(義)は、丹州上屋敷にて、貴公様御承知のおも

むき。国詰の武士、伊達新左衛門弟与作、右の色紙を持参いたし、昨夕京着致したなれど、旧例に任せ、氏神加茂の明神の神前へ捧げ、当家武運長久の祈り。その夜与作は通夜いたし罷り上れば、をし附持参仕るでござらふ。

官太 万事抜目なき与作、神事の旧例といひそぎ、もはや参上いたすでござらふ。殊更、この程、官領職より仰下りしは、入間家の系図の一巻、御改めの義に附、御国屋敷へ申越したる所、与作の御親父、伊達の与三兵衛、日あらず持参いたすとの事。去に依て、お屋敷内はお取り込、それゆへ何角不馳走の段、申訳のため、今宵は夜ととも、官太夫めも、その元をお見立の為、餽酒一献おすゝめ申そふ。本田氏にも、ゆるりとお寛ぎなされいさ。

弥惣 それは何かとお心づかひ、御無用になされいさ。年寄の永の道中、近頃、近年は、ア、苦勞に罷なり申して、ハ、くくくく。ア、イヤ、鷺塚氏、この間お上屋敷にて、新左衛門殿のお噂でうけたまわつたが、貴公には御前の御意に叶ひ召され、御小袖拝領なされたと承わつたが、何かその品は殿様の御秘蔵。ア、結構な御道具と申事。

官太 夫どの、左様かなく。

官太 いかにも左様でござる。いつぞや、賭的御上覧の砌、拝領致せし割(きり)筈。則これでござるて。

ト刀より抜き取り見せる。弥惣左衛門、取つて

弥惣 いかさま、これは結構な御道具。模様は、ア、何でござるな。官太 彫は則、後藤祐乗が千足獅子。イヤモウ、拙者が身にも命にも、替へ難き割筈。誠に大殿の御恩を存すれば、ア、おろそかには思ひませぬて。

左内 なる程、官太夫殿のお詞、コリヤ左様覽(み)すも御尤。その賭的御上覧の節は、いつ頃でかござりましたな。

官太 いかにも悦の義は忘れぬとやら、去年三月廿七日の義でござつた。左内 いかさま、左内めも、その節居合せましたが、その時分と存じら

れまする。ア、その節は身共なども、おうらやましう存じたて。

官太 これは、御挨拶でござる。

弥惣 サ、お小柄は、お返し申まする。

ト官太夫へ渡す。この時、向ふはたくにて、石部金六、土山郷助、いつさんに出て来り。

金六 御両家老、これにでござりまするか、一大事が出来仕つてござる。

官太 一大事とは気づかはしく、左内殿にも幸ひこれに。サ、逐一を云やれ、子細はどうじや。

郷助 いかにも、その儀の御訴へ、夜前、与作が御国元より、加茂の屋しろへ持参の御宝、お家に伝わる手綱の色紙、神前へ捧げし所、神職采女を切り殺し、色紙は紛じついたしてござる。

トこれにて、三人をどろく。

弥惣 色紙が紛失つかまつれば、身共も捨てゝは関東へ、ヤ、ゝゝゝ、コリヤ大変でござるぞ。

官太 シテ、御宝を奪い取りしは、他より忍びしくせ物か、又は与作が仕業にてか。

金六 サ、その義は分明ならされ共、役目の与作も行衛知れず、社内の騒動、大方ならず。

郷助 折からその場へ藤浪〔羽根川〕氏、駈附参つて立合の上、我々は御知らせ(に)、途中をかけ附て、唯今これへ。

官太 聞すて置かれぬ一大事。左内殿、貴殿の御賢慮承りたひ。

左内 仰せではござれ共、拙者とても、差当つたるお家の御難義。ハテ、なんとがな。

ト思入、又候向ふはたくにて、伊達の与作、上下、股立にて、右馬之助と立廻りながら出て来り、本舞台よりき所へ来て、

右馬 疑ひかゝつた伊達の与作。身が縄かけて、与作 ヤア、縄かゝれとは推参至極。

右馬 デモ、預りの色紙の紛失。

与作 サ、それは。

右馬 それ故、身共が、

ト立廻つて、きつとなる。

左内 ヤレ待たれ右馬之助。官太夫殿はじめ、左内これに罷りあるに、貴殿老人の料簡にて、殿より御知行頂戴いたす、与作へ縄かけ召されんとは、却而事を荒立つ道理、他ぶんへ知らさぬ一大事、ひそかに様子、糺し召れい。

右馬 御尤にはござれども、宝失ひたるその場にも、居合せませぬは、たしかに逐電、それゆへ捕へて糺明致ぞ。

左内 これも尤、夜前のしだら、色紙の紛失。言訳あらば、与作、様子を物語られよ。

弥惣 手前屋敷の御宝は、当家(へ)身どもお渡し申。この方へ請取申す、色紙紛失いたしては、弥三左衛門、関東へ手ぶりですくゝ、どの面さげて。サ、御両所、たつた今、お渡しなされい。左なくては、この方の宝、お返しなさるか。左様なくては弥三左衛門、武士が立ませぬ。イヤサ、侍が立申さぬぞ。

官太 コリヤ、その元のお云やるも御尤。左内殿、宝の失せしは詮方なけれど、関のお使者へ、この儘にては相済ますまひ。サ、与作、シテまた外に、手がゝり有てか、サ、どふじや。

与作 申訳がござりまする。きつと致した申訳が○とは申せ共、いわば郷変、お使者へ送る手綱の色紙、持参なせしはこの与作、夜前京地へ当着せしかど、旧例とござつて、加茂の屋しろへ持参なし、武運の御祈禱終りしは、丑三つ過と覺し刻限。面を包みし忍びの曲者、まさしく大勢うかゞひ寄つて、色紙を奪ひ、逃げゆく所を支へる神職、たゞ一刀に打て捨、右往左往に散乱なす。通夜せし与作が耳にいり、のがさじものと追かけしに、手裏剣。もし手がゝりにと存するうち、件の曲者取逃し、申訳なき身の誤り、奪返さんその内は、何れも方に面談も、どの面さげて(と)存せしかど、証摺の小柄手にいる上は、これ

を詮義の綱にもと、すご／＼参りしこの御館みやかた。いづれも方、御推量下されひ。

左内 コリヤ、なんとお云やる、色紙を奪ひ失せたる曲者、打かけし手裏剣、その方の手にいりしとな。

与作 いかにも、詮義のよき手がゝり、割筭わしのこの片かたし。

ト出す。官太夫、ぎよつとして、右馬之助と顔を見や合、をもらい。

左内 ドレ、その筭。

右馬 身共へ渡しやれ。

トかゝるを、与作、立廻りあつて、

与作 イ、ヤ、この品、何にその元へ。お渡し申すは鷺坂氏へ。

右馬 デモ、その品を、

トかゝるを突きつけ、小柄を左内が前に持ち行く。

左内 証拠の筭。

官太 それを、

ト寄るを、ちよつと立廻つて、

左内 コリヤ官太夫殿、なんとなさるゝ。

官太 アイヤ、曲者が打かけし小柄、官太夫めも詮義の手がゝり、見よふと存じて、

左内 コリヤ御尤。お役柄と申、その元様にも、お目にかけていでなんといたそふ。官太夫殿、御覧なされひ、○

ト小柄をいだし、

小柄は則、割り筭、後藤祐乗が千足獅子。コリヤコレ、只今鷺塚氏、殿より拝領をしやつた、その筭の、片しに似寄のこの品は。官太夫殿、ハテ、世の中には似寄の道具も、あればある者でござる。

ト官太夫へ目を附る。官太夫、思入ありて、

官太 なる程、似寄つた割筭、広ひ浮世に、沢山無ふてなんと致そふ。

左内 シテ、その元の割筭の、片しはそれに、御所持でござるかな。

官太 アイヤ、その片しの筭は、

トをもらい。
左内 これでござるか、

ト件の筭を見せる。

官太 ア、滅相な。どうしてそれが。

左内 然らば、いづれへ遣わされた。

官太 サ、その義は、

左内 いかゞめされた。

官太 サ、その片しの筭は、○

ト右馬之助と顔見合せ、色々ありて、

盗ぬすまれました。

左内 ヤ。

官太 アイヤ、くれました。

左内 そりや、何者に、

官太 弟、八平次に、

左内 いつ遣わされた。

官太 去年遣わした。ハテ、不屈者の八平次。殿の金子を虚妄むじまの上、目にあまつたる弟め、殿へ願ふて勘当いたしたその砌、八平次めが、小柄を所持して家出いたした。

左内 そりや、いつ頃の義でござるな。

官太 ハテ、八平次は、去々年勘当。スリヤ、遣わしたは、去々年の義でござらふ。

左内 スリヤ、筭は八平次殿へ、去々年遣わされたとな。それに又、大殿より御拝領は、去年三月。ハテ、跡や先な、義でござるな。

官太 ヤ。

左内 夜前のしだら、小柄の出所、殊に、弟御八平次殿、勘当の身の行衛知れず。それを幸ひ、何かの科を彼に仰せど、鷺塚氏。跡先揃わぬ詞のてんどう。さわさりながら、血をわけし、実の弟をぬす人に、これが誠に、兄弟他人の、○

トをいれあり、

八平次には只今より、お上みの疑ひ、かゝりますぞよ。

トきつといふ。

官太 そりや申さずとも知れた事、かゝる大事を仕出す弟め、お家の宝を奪ひし上は、捕へ次第に縛り首。その災難が嫌さゆへ、とうに勘当つかまつり、他人の身どもへ、よもや、貴公の疑ひは。

左内 何にしに貴殿へかゝりませふ、当家へ忠儀の驚塚氏、されどもこれなる筈は、八平次の所持とござれば、気の毒ながら、御家に仇する八平次、よもこのまゝには、差措かれませぬ。

官太 ソリやいづれとも、御勝手次第。

弥惣 シテ、身共への御返答は。

与作 そりや与作めが、御使者へ御願ひ。

弥惣 アノ、身どもへか。

与作 唯今御聞の通りの様子、色紙の盗人は八平次ときわまる上は、彼が有家を詮義いたし、めでたふ色紙を取かへし、跡より入間の御館へ、拙者が持参いたすでござらふ。

弥惣 しからば身共は立帰り、この旨、上へも披露せんが、もしその色紙出ぬ時は、姫の縁談何かの妨げ、もしや兩家の確執とも、与作 サ、そりやお氣遣ひなさるゝな、与作が身を粉に碎ひてなりと、色紙は詮義仕出して差上ります。日延の日数も六拾日、このお願ひは

左内 殿、御前よしなに頼み存する。

左内 スリヤ、与作には日延を願ひ、その内色紙の行衛の詮義、まづ手がゝりは八平次、彼を捕へて糺明いたさば。

ト官太夫へ目をつける。

官太 弟であらふが、勘当の他人となつたる八平次。身共も免咄、きやつを召取、拙者が明りを立てねばならぬ。

左内 そりや御尤、申さば貴殿の御所持の筈。その片し故、官太夫どのにも御心配の程、尤至極。東の御使者も御聞の通り、家にもかゝる今

日の仕儀。いづれ宝は御跡より、与作が持参つかまつらん。右之日延を、貴殿よしなに。

弥惣 承知いたした。なりたけ急いで色紙の詮義。

与作 御氣遣ひなさるゝな。これと申すも姫君の縁辺変更、御家の確執願ふやからが、館の内に。

トあたりへ思入、右馬之助はじめ敵役皆々こなし、

弥惣 拙者は弥々、明朝出立。

官太 当家の送りは土山郷助〔石部金六〕大津辺迄、お見立の役目。

金六 心得ました。栗田口にて、人馬の待受け。

郷助 長の道中、御心附られ。

右馬 御氣〔の〕毒には手綱の色紙、取り召れぬ本田氏。宝の有家も、よもや早速。

弥惣 ヤ。

右馬 近頃笑止千万に存する。

左内 色紙の盗人、八平次にきわまる上は、与作は急ぎ彼が詮義を。さわさりながら、驚坂が又口談の旨あれば、役所にをいて物語らん。

与作 拙者も貴公へ、申度き一義ござれば、左内殿。

左内 万事は役所で、

官太 驚坂氏。

左内 官太夫殿。

弥惣 同道いたそふ。

左内 与作、お来やれ。

与作 まづ、ござりませう。

ト唄になり、左内、与作、官太夫へ目を附る。弥惣左衛門、近習金六、郷助、附いて奥へはいる。官太夫、右馬之助、残る。

右馬 官太夫殿、貴殿の所持の割筈、与作めが手へ渡り、色紙詮義の手がゝりとなりましたが、さて色紙は、アノ貴殿が、

官太 コレ、○